

LONDON CALLING / ザ・ライフ・オブ・ジョー・ストラマー

2007(平成19)年7月26日鑑賞(試写会・テアトル梅田)

★★★



監督=ジュリアン・テンブル/出演=ジョー・ストラマー/ジョニー・デップ/ボノ/マーティン・スコセッシ/ボビー・ギレスピー/アンソニー・キーディス/ジム・ジャームッシュ/フリー/スティーヴ・ジョーンズ/ダミアン・ハースト/ジョン・キューザック/マット・ディロン/スティーヴ・ブシェミ/ドン・レッツ/コートニー・ラヴ/テリー・チャイムズ/ルース・メラー/トッパー・ヒードン/ミック・ジョーンズ(東北新社配給/2006年アイルランド、イギリス映画/123分)

第3章

愛と死を見つめて

……ジョー・ストラマーは1976年から10年間、「クラッシュ」のリーダーとして大活躍したパンク音楽の「異才」だが、弁護士活動に専念していた当時の私には全く縁のなかったもの。しかし今、その音楽を聴くとその先進性とメッセージ性に共感できるばかりか、私より3歳年下の彼の生きざまと人間性にもすごく興味が……。あなたも食わず嫌いをせず、こんな映画もたまには……。

この夏は、この手の映画が次々と……

私は音楽映画は大好きだが、それはミュージカル系、クラシック系、ダンス系等々で、ロック系やパンク系の映画はこれまでほとんど観たことがない。テアトル梅田では過去にもそういう系統の映画を時々やっていたが、私はあまり目にとめていなかった。ところが今年の夏は、今日試写で観た『LONDON CALLING ザ・ライフ・オブ・ジョー・ストラマー』をはじめとして、『カート・コバーン アバウト・ア・サン』(06年)や『グラストンベリー』(06年)さらに『スクリーミング・マスターピース』(05年)など、その系統の作品が目白押し。

私はエルビス・プレスリー、ビートルズ、ローリング・ストーンズなどはよく知っているが、実はカート・コバーンの名前もこの映画のジョー・ストラマーの名前も知らなかったもの。さらにこの映画の中でジョー・ストラマーが「ピストルズはいきなり全てを噴き飛ばした。ドアを蹴破る前の催涙弾だった……それだけ新しく、何百万

年も先を行っていた。街の音楽を全て破壊してしまった。彼らがステージに上がった瞬間から他は完全に終わっていた」と語っているバンド「セックス・ピストルズ」の名前は聞いたことはあっても、その音楽もこれまで全く聴いたことがなかったもの……。

しかし、お世辞やおべんちゃらではなく、ジョー・ストラマーの音楽は聴いていて全く違和感がなく、すんなり入り込んでいくことができた。したがって、123分という時間がホントにアツという間に過ぎてしまったことにビックリ。

ジュリアン・テンブル監督と「クラッシュ」「セックス・ピストルズ」との一体感は……？

ジョー・ストラマーを最も有名にしたのは、ギターのミック・ジョーンズらと共に活動した「クラッシュ」としての1977年から1985年までの10年間の活動によるもの（もっとも、ミック・ジョーンズは1983年にクビ……）。この間6枚のアルバムをリリースし、イギリス、アメリカで大活躍したクラッシュは、「同じ年に生まれ、多くの矛盾や時代や体験を共有してきた」というこの映画を監督したジュリアン・テンブル監督にとっても、セックス・ピストルズと共にかけがえのない存在だったよう。ジュリアン・テンブル監督は、1976年のクラッシュ結成時からジョー・ストラマーらを追いかけたが、セックス・ピストルズの企画が先に動き始めたため、処女作『Sex Pistols Number 1』（77年）や『セックス・ピストルズ／グレート・ロックンロール・スウィンドル』（80年）、さらに『NO FUTURE A SEX PISTOLS FILM』（00年）を監督することに。しかし、「ジョー・ストラマーの最後の10年間を親しい友人として過ごした」というジュリアン・テンブル監督は、2002年にジョー・ストラマーが亡くなった後、まず『GRASTONBURY グラストンベリー』（06年）を完成させたうえ、満を持して本作を発表することに……。

ジュリアン・テンブル監督もジョー・ストラマーも1952年生まれだから、私の3年後輩。したがって、ジョー・ストラマーが「クラッシュ」のリーダーとして最盛期を迎えていた時代は、私も弁護士として朝早くから夜遅くまで活動していた時期と重なるから、私がそんな「雑音」に耳を傾けるヒマがなかったのは当然。しかし、ジョー・ストラマーが2002年に死亡したことを受けて、彼の生涯がまとめられたこの映画で彼の生きざまを見れば、まさに感無量……。

興味深い子供時代

この映画は、1976年のクラッシュ結成時からジョー・ストラマーを追いかけたジュリアン・テンブル監督の作品だが、そこに描かれる子供時代のジョー・ストラマーの姿が興味深い。ジョー・ストラマーの父親はインド生まれの外交官だが、音楽的素養はまるでなし。したがって、スコットランド出身の母親の音楽的素養を次男のジョー・ストラマーが受け継いだようだが、18カ月年上の兄デヴィッドはジョー・ストラマーとは性格が正反対だったらしい……。

兄は真面目で優秀、弟は成績是最悪だが要領をカマすのは上手で、人づき合いも抜群。そんなパターンがこの兄弟にピッタリ当てはまったらしい。さらに、外交官という父親の職業上、トルコで生まれたジョー・ストラマーたちは、その後カイロ、メキシコシティ、旧西ドイツのボンなどを転々とした後、ロンドンの厳格な寄宿学校で過ごしたが、この間父親との面会はほとんどないまま、悪さの限りを尽くしていたらしい。当時の8mmフィルムで撮られたそんな様子がスクリーン上に次々と流れてくるが、これらは何とも貴重な映像。

弟は両親と会えない寂しさやさまざまな抑圧による欲求不満をこんなふうには適度に晴らしていたが、兄デヴィッドはそれができなかったためか、若くして自殺してしまうことに……。そんな兄を見たジョー・ストラマーは、一方で人間の不幸を一身に背負ったような人格を形成しつつ、他方で漫画家としての道を探りながら、ロックバンドを結成したり……。

時代は1970年に入ったところ。ここでは、ベトナム戦争反対の世界的な運動が高まり、それに呼応するかのように世界の若者たちの反体制のうねりも高まっていくことに。そしてもちろん、ジョー・ストラマーは常にそんな若者たちの先頭を走っていた様子……？

興味の第1は音楽性、第2は人間性、そして第3は……？

ジュリアン・テンブル監督がセックス・ピストルズやジョー・ストラマーに対して興味を示したのは、何よりも第1に彼らの音楽性だが、ジョー・ストラマー音楽の時代の先取り性やメッセージ性については私がここであれこれと評論する能力はないのでノーコメント。ただ私も一発でハマってしまったという告白だけに留めておこう。

そこで、私がジョー・ストラマーに対してもつ興味の第2はその人間性。もっとも、それだけではあまりにも漠然としてしまうが、バンド結成時におけるメンバーの集め方や、メンバー変更（切り捨て）の際の実行力、とりわけロクにギターを弾けないミック・ジョーンズにギターを弾かせるという決断を見ていると、寄宿舎時代に培った人間観察眼のすごさがよくわかる。さらに、セックス・ピストルズに衝撃を受けたという彼の変わり身の早さと、クラッシュ発足後のバンド活動へののめり込み方や集中力はすごいもの。

そして興味の第3は、人間性と関連するものだが、彼の女性観と父親としての姿。子供の頃は完全に父親と縁を切ろうとし、30代はあれほどバカをしていたジョー・ストラマーも、2人の女の子が生まれ成長するにつれて、何とも意外な父親像を……。他方、女性に関しては「ジョーにも最悪なところがある。僕が恋人とケンカして彼女を部屋から追い出した。するとジョーが彼女と……。それは、相当傷ついたよ」と告白している元クラッシュのドラマー、トッパー・ヒードンの証言を聞けば、大体想像がつこうというもの……。

タイトルには少し工夫が必要……？

この映画の原題は、『JOE STRUMMER : THE FUTURE IS UNWRITTEN』、つまり「将来（未来）はまだ書かれていない」という抽象的なもの。これは、ジョー・ストラマーは2002年に50歳の若さで亡くなってしまったが、彼の物語は今なお人々に語り継がれ、まだ将来（未来）は書かれていないというような意味……？ ところが、邦題は『LONDON CALLING』というサブタイトルをつけているが、『ザ・ライフ・オブ・ジョー・ストラマー』という面白くも何ともない、直接的なもの。わかりやすいといえばたしかにそうだが、映画のタイトルとしては、もう少し工夫が必要では……？

さらに、ジャンルを広げていかなければ……

今回この映画を観たことで、私はロック音楽やパンク音楽についてのミュージシャンたちの音楽性や生きざま・人間性についての興味が急速に広がっていくことになった。その意味で、今回は夜の8時55分から11時までの上映だったが、来て良かったと思っている。これからはさらに、こういう映画までジャンルを広げていかなければ……。

2007(平成19)年7月27日記

「坂和的中国映画論」 in 北京電影学院

「中国映画大好き人間」の私の夢の1つが実現し、1つが実現に近づいた。実現したのは世界的にも珍しい国立の映画総合大学の最高峰、北京電影学院での「坂和的中国映画論」と題する特別講義。他方実現に近づいたのは、中国人民13億人をターゲットにした中国語による『坂和的中国映画論』の出版だ。特別講義の実現は07年5月8日東京の「突然朝食会」で北京電影学院客員教授の肩書をもつ古澤敏文氏との出会いから（『シネマルーム13』386頁ミニコラム参照）。半信半疑状態でメールでの打ち合わせを重ねながら、日程を07年10月7日～11日と決定。講義は当然通訳を介するから、難しいのは監督や俳優名そして映画のタイトルの伝え方。張藝謀、陳凱歌、鞏俐、章子怡ら超有名な人名は通じるが、たとえば第6世代監督の賈樟柯、張楊、張元、陸川等は中国語の発音が

できなければ全然通じない。また『初恋のきた道』といっても中国人は誰も理解できず、『我的父親母親』でなければダメ。『たまゆらの女』（周漁の火車）、『LOVERS』（十面埋伏）、『PROMISE』（無極）も全く同様で、タイトルが一致するのは『HERO』や『最後の恋、はじめての恋』（最後の愛、最初の愛）くらい。そのため、中国語版レジメはA4数枚だが、私の準備資料は膨大なものに。また10月10日の講義当日は朝4時半に起きて猛勉強し、通訳との打ち合わせも綿密に。その甲斐あって、私の熱弁を誰一人居眠りすることなく聴いてくれた約50名の院生の評判は上々で、終了後は質問攻めにあった他『シネマルーム』の中国語版の要望までも。こりゃ第2の夢も早急に実現するべく奮闘しなければ。

2007（平成19）年11月21日

